

## 二つの「ディーワーン」

——イルハン国初期のイラン地域支配をめぐる——

高木 小苗

### はじめに

モンゴル帝国第4代モンケ・カアン（元朝の憲宗：在位 1251-59 年）は即位すると、弟クビライに東方遠征を命じ、1254 年には年下の弟フレグをアム河以西地域の西征に送り出した。フレグは 1256 年にアム河を渡ってイラン高原に到り、ニザール派のアラムート城、アッバース朝の首都バグダードなどを征服した。やがて 1259 年にモンケ・カアンが南宋遠征中に急死すると、フレグの兄クビライとモンゴル本土を守っていた弟アリク・ブケが、カアン位継承をめぐる対立する。この混乱は 1264 年にアリク・ブケが投降するまで続き、この状況を受けてフレグはアム河からユーフラテス河に至るいわゆる「イラン地域 *Īrān zamīn*」に留まり、イルハン国（1258-1330 年代末）を形成した。

かつて A. K. S. Lambton は、遊牧政権によるイラン支配は、その全土において一様であったわけではないという視点にもとづき、モンゴル支配期のイラン南部のファールス州とキルマーン州の財務行政を研究した。そしてファールス州とキルマーン州では、モンゴルが征服地ではしばしば実施した人口調査（*shumār*）が行われたという記録が残っていないこと、人口調査にもとづき導入されたクブチュル（*qūbjūr*）と呼ばれた人頭税徴収の記録も少ないことを指摘した（Lambton 1986: 90）。一方、ルーム地方（アナトリア半島一帯）でも、モンケ・カアンは人頭税クブチュルを禁止している（井谷 1980）。さらに中世トルコの通史を執筆した C. Melville は、モン

ゴル支配下のルーム地方にはクプチュルが導入されなかったという見解を呈示している (Melville 2009: 80)。

本稿では、これらの見解を踏まえ、モンゴルによるイラン地域の支配について、モンゴル帝国初期のカアンが直接支配した時期から、イルハン国の第2代アバガ・ハン治世 (在位 1265-82 年) までにかけて考察したい。

モンゴルが最初にイラン地域に進軍したのは、モンゴル帝国の創設者チンギス・ハン (在位 1206-27 年) による 1220 年代前半の西征であった。チンギスはイラン東端に進攻してモンゴル高原に帰還するにあたり、一部の軍をイラン方面に派遣した。そしてチンギス・ハンの死後、彼の末子トルイの監国期から、チンギスの長子・後継者である第2代オゴデイ・カアン治世 (在位 1229-41 年) 初期までの間に、タマ軍 (辺境鎮戎軍) が派遣されるとともに、財務機関ディーワーン (dīwān) が設置され、アム河以西地域の財務行政を掌るようになった。このディーワーンは、『元史』『憲宗本紀』の「阿母河等処行尚書省」に同定される (本田 1991c)。本稿では、後述するイルハン国の中央ディーワーンと区別するため、便宜上、この漢語名を使用する。ディーワーンの官僚達は、征服地の人口調査、各種の税・徴税区の設定、徴税を行い、カアンは征服地に自らを含めた王族の権益を設定した。

本稿の第1章では、モンケ・カアン治世末までに、阿母河等処行尚書省により人口調査が実施され、王侯の権益が設定された地域を確定する。次に第2章では、阿母河等処行尚書省の管轄下の地域に対し、フレグの西征による新征服地およびフレグが支配権を承認した地方政権の支配地には、どのような支配体制・税制が導入されたのか明らかにする。そして第3章では、イルハン国の財務行政機関の中核である中央ディーワーンの起源について考察し、第4章では、イルハン国の成立が阿母河等処行尚書省とその管轄地域にどのような影響を及ぼしたのか検討したい。

## 1. 歴代カアンによる人口調査と「分地分民」

モンゴル帝国の創設者チンギス・ハンは、1206年、モンゴル高原の遊牧諸部族を統一し、それらの諸部族を千戸組織に編成した。これらの千戸組織は、百戸・十戸の下位集団から形成されていた。その後、チンギスは、これらの千戸組織の一部を複数ずつ諸子諸弟に分配し、それぞれの遊牧地を定めた。

その後、チンギス・ハンと彼の後継者であるカアン達および王族・功臣（以下、王侯と略記する）は、これらの千戸から徴発された軍隊を率いて、ユーラシアの東西へ遠征し、各地を征服した。ある地域が征服されると、カアンは、戦利品・捕虜・工匠（手工業者）などを、王侯に分配することを常とした（四日市 2007；川本 2013）。

さらにチンギス・ハンの後継者オゴデイ・カアンは、1236年、中国の中原において旧金領の住人の戸口調査を行わせ<sup>(1)</sup>、一定数の戸口と、その付籍地を、モンゴル王侯に分与した。モンゴル王侯は、毎年、自らの戸口に課せられた税のうち、一定額を得ることを認められていた。またイルハン国の創設者フレグの兄であった第5代カアン、クビライ（在位 1260-94）は、1279年に南宋を征服したのち、江南の一定の地域に登録された住民を、中原同様に王侯に分与した。江南では、毎年、江南戸鈔という税収が現金でおさめられていた。

これらの王侯に分与された戸口は、漢語史料ではしばしば「分民」、また戸口の付籍地は「分地」と記されている。これに基づき、松田孝一氏は、カアンがモンゴル王侯に戸口とその付籍地を分与したことにより成立した政治・社会体系を「分地分民」制度と定義した（松田 1978）。

「分民」は、モンゴルの伝統である被支配者の人数に基づく「属人主義」的な支配体制を示す表現と言えよう。一方、このようなモンゴル帝国初期のカアンによる分民の設定は、後ほど具体例を示すように、同時代のベル

シア語・アラビア語文献では、王侯に対する「属地主義」的な一定地域の支配権の授与として表記される場合がある。このような記述には、西アジア出身の著者の認識が反映されていると考えられる。漢語史料の「分地」という語は、こうした西アジアの文献の叙述に対応していると言えよう。そこで本稿では「分地分民」という概念を、イラン地域における王侯に対する征服民・征服地の分与の分析に応用することを試みる。

翻って西に目を向けると、チンギス・ハンは、1220年代前半に、正室ボルテの4人の王子、ジュチ、チャガタイ、オゴデイ、トルイを率いて、中央アジア・アム河以西地域に向けて遠征を行った。この西征の後、さらなる諸地方の征服と治安維持のために、2つのタマ軍が派遣され、現在のイラン北西部のアゼルバイジャン方面と北東部のホラーサーンからアフガニスタンにかけての地域に駐屯するようになった。

その一方で、本稿冒頭で述べたとおり、現在のイラン北東部のホラーサーン州には、財務機関ディーワーン (dīwān) が設置され、アム河以西の征服地の徴税を管轄した。チンギスの4人の王子と子孫、すなわち4王家の王族は、アム河以西の地域に、それぞれの権益を代表する家臣アミール (amīr) 達を任命し、アミール達は阿母河等処行尚書省に書記を送りこんだ。4王家は、彼らを介して、征服地における権益を獲得し、使節を派遣して収益を得るようになった。

やがてトルイの長子である第3代モンケ・カアンが即位すると、1252年に漢地で新戸口調査と新税の割付けを実施し (愛宕 1988)、1253年には南ロシアの人口調査を命じた (Allsen 1987)。阿母河等処行尚書省の長官アルゲン・アカも、1252年にイラン地域でのクブチュル (qūbchūr) の施行を命じられた。彼は、1253年末から1255年にかけて、イラン地域の一部で、人口調査 (shumār) を行い、それに基づきクブチュル (qūbchūr) と諸税 (amwāl) を割付けた (*Jahāngushāy*: II, 258; 本田 1991c: 120)。第2代オゴデイ・カアン治世と彼の長子第3代グユク・ハン治世 (在位



## 二つの「ディーワーン」

1246-48年)に、イラン地域では人口調査が行われていたが、後述のとおり一部の地域に留まり、地域によっては徴税が継続的・定期的とは限らず、税目や徴収時期の定まらない取り立てが行われたと思われる。

クプチュルは、元来は遊牧民に課される家畜税を指したが、モンゴル支配下のイラン地域ではモンゴルが施行した軍隊・駅伝・使節の経費を賄うための現金納の人頭税<sup>(2)</sup>、あるいは定住民に課した家畜税の意味でも使用されるようになった(Doerfer 1963: 387-92; 本田 1991a: 287-90; 本田 1991d: 209-11)。また当時のペルシア語文献では「クプチュルとカラン (qalān)<sup>(3)</sup>」という表現で、モンゴルが課した人頭税・賦課一般を指す場合もあり(本田 1991a: 299)<sup>(4)</sup>、クプチュルの指す意味合いは、用例ごとに解釈する必要がある。本稿ではクプチュル税と表記し、基本的に現金納の人頭税を指すこととする。

その後、アルゲン・アカは、1256年にモンケの宮廷に向かい、人口調査の結果を報告した。当時、阿母河等処行尚書省に財務官僚として出仕していたアラー・アッディーン・アターマリク・ジュワイニーは、彼の著作『世界征服者の歴史 *Tārīkh-i Jahāngushāy*』の中で、モンケ・カアンは、1256年に「この度、諸地方の人口調査 (shumār) が行われたので、諸地方をあらゆる親族と兄弟達に割当てられた (takhṣīṣ farmūda)」と伝えている (*Jahāngushāy*: vol. 2, 255-60)。この記述は、『元史』卷三「憲宗本紀」の「阿母河回降民分賜諸王百官」に対応する(本田 1991c: 123; Allsen 2001: 48)。すなわちモンケ・カアンは、中原およびトルキスタン、そしてその他の征服地の「分地分民」の設定とおなじように、アム河以西の征服地の「降民」の人口と、その人口の登録地を、王侯に分与したのである。

この分与は、イランで実施された最も大規模な王侯の所領設定であったが、基本的には過去の「分地分民」の設定を踏襲するモンゴルの慣習にのっとり、王族の既得の権益、2代オゴデイ治世と3代グユク治世の人口調査と権益の設定に、新たに調査対象となった地域・住民数を加え、再整

理されたうえで、分与されたはずである。

またオゴデイ治世 1235 年に作成された中原の戸籍簿『乙未籍冊』およびモンケ治世 1252 年に作成された壬子の戸籍統計が、元朝で代々受け継がれたように（松田 1990; 愛宕 1988）、オゴデイ治世とモンケ治世のイラン地域における人口調査の結果は、イルハン国に受け継がれたと考えられる。すでに Lambton が言及しているように（Lambton 1986: 90）、イラン地域の人口調査の頻度については、699/1299-1300 年に亡くなった詩人 Pūr Bahā が「30 年に 1 回」と詠っている（Minorsky 1956: 194）。すなわちイランでの全国規模の人口調査は、モンケ治世以降およそ 30 年間は行われることはなかったようである。

近年、渡部良子氏は、13 世紀末の第 5 代イルハン、ガイハト治世（治世 1291-95）の財務事情を伝える財務術指南書『会計術における導きの書 *Murshid al-ḥisāb*』を紹介・分析した。同書に見られる「某年における、世界征服者のヤルリグ（勅令）と偉大なるアミール某の指示に従い行われたヤズドのトゥメンの人口調査」（渡部 2011: 27; *Murshid*: 106b-107b）とは、「世界征服者（*jaḥāngushāy*）」であるモンケ・カアン（*amīr*）の勅令により、「アミール（*amīr*）」、つまり阿母河等処行尚書省の長官アルグン・アカの指揮下で実施されたモンケ治世の人口調査を指すと考えられる。そしてイルハン国の租税台帳に収録されていた人口調査簿（*iḥṣā*）（渡部 2013）とは、モンケ・カアン治世の調査に由来する記録で、恐らくはモンケ治世の 1250 年代後半に行われた人口調査から 30 年経過して、後述のとおり、第 7 代イルハン、ガザン（在位 1271-1304 年）が 697/1297-98 年に全国的なクプチュル税の設定を行った際に見直されたものであったと考えられる。またモンケ・カアンは、1252（壬子）年に中原で行った戸口調査に基づき、1257（丁巳）年に「分地分民」を設定した。この時に新たに権益の代表者として分与の対象となった王族は、モンケの同母弟クビライ、フレグ、異母弟（トルイの庶子）モゲ、ブジェク、ソゲドゥであった（村岡 1992:

## 二つの「ディーワーン」

25)。また13世紀初めに成立した史書『ワッサーフ史 *Tārīkh-i Waṣṣāf*』が伝える中央アジアの都市ブハラにおける新人口調査の実施の記事によると、ブハラの人口は、ジュチ家2代宗主バト、モンケの実母ソルカクタニ・ベキ、当時の「カアン」の三者の間で分配された (*Waṣṣāf*: 51)。この記事は、一般的にモンケ治世のことであると考えられている (川本 2000)。これらのモンケ治世の中原とブハラの分民の事例は、モンケが自らの母および兄弟を対象とする「分地分民」を各地に定めたことを示している。そしてイラン地域でも、モンケが即位した際に、実母ソルカクタニ・ベキの書記、同母弟クビライ、フレグ、アリク・ブケ、異母弟モゲの権益を代表する代理 (*nawkar*) が阿母河等処行尚書省に任命されたことを確認できる (*Jahāngushāy*: II: 255-56)。これらのことより、モンケ治世のイラン地域における分地分民の際に、トルイ家王族の権益が設定されたと判断できよう。

それではモンケが王侯に分与した「分地」「分民」は、主にイラン地域のどのあたりに存在したのだろうか。まず先述の『世界征服者の歴史』によると、オゴデイ治世の阿母河等処行尚書省の長官コルグズは、「ホラーサーンとマーザンダラーンの税の諸事 (*umūr*) を記録し、諸財 (*amwāl*) を蓄え、方々から帝王にふさわしき珍宝を獲得した。そして改めて人々の数 (*shumār-i mardum*) を数え、正税の設定 (*qarār-i mālḥā*) を行い、工房 (*kārkḥānāt*) を設営した」 (*Jahāngushāy*: II, 229: 本田 1991c: 111; 川本 2013)。

そしてモンケ治世に、長官アルグン・アカが行尚書省の官僚達を調査のために派遣した地域は、ホラーサーンとマーザンダラーン州であった (*Jahāngushāy*: II, 256; 川本 2013)。またアルグン・アカ自身と他の官僚達が人口調査とクプチュル税の設定に向かった地域は、ゲルジスタン、アッラーン、アゼルバイジャン、イラク・アジャムの諸州とヤズドである<sup>(5)</sup> (*Jahāngushāy*: II, 258-59; 北川 1998; 川本 2013)。さらにモンゴル支配期のアルメニアについて研究した D. Bayarsaikhan によると、1253 年、または 1255

年に大アルメニア州でも人口調査が行われた (Bayarsaikhan 2010: 108-109)。

さらに周知のとおり、イルハン国末期に、財務官僚ハムド・アッラー・ムスタウフィーが執筆した博物誌『心魂の歓喜』の地理情報には、トゥメン (tūmān) という地域区分が散見される。本田實信氏や川本正知氏は、これらのトゥメンが、ほぼモンケ治世までの人口調査によって設定されたと考察している (本田 1991c: 122; 川本 2000; 川本 2013)。

トゥメンは「万」「多数」を意味するモンゴル語・トルコ系諸語に由来する語彙である。モンゴルがイラン地域で行った人口調査は、「千 (hazāra)」を定める (*Jahāngushāy*: II, 258) という表現からもわかるように、基本的に軍隊の構成と同様に、千人・千戸を一つのまとまりとしており、さらにその下に「百 (ṣada)」、クブチュル税を徴収するための最小単位「十 (daha)」が存在した (*Jahāngushāy*: II, 256, 261; 川本 2000; 川本 2013)。ただし、トゥメンはモンゴル軍の「万戸」の構造と同じように、厳密に「万」という数値どおりに 10 個の千戸から構成されていたわけではなく、様々な規模の「千戸」がいくつも集められた集合体であったと考えられる。

イラン地域に存在したと伝えられるトゥメンは、本田氏・北川氏・川本氏の研究、そして『心魂の歓喜』と『世界征服者の歴史』の記述にもとづくと、【表 1】のとおりである (本田 1991c: 北川 1998; 川本 2000; 川本 2013; *Nuzhat*: 55, 150; *Jahāngushāy*: II, 255)。なおホラーサーンのトゥメンについては、本田氏の見解を採用した (本田 1991c: 147)。

トゥメンは、人口調査の対象となった州 (wilāyāt) の州都 (dār al-mulk)、その他のより小規模な都市 (shahr, balda) や村落 (qarya) などの人口密集地を拠点に広がり、都市周囲の郡部 (wilāya, ‘amal, nāhiya) を包括する地理的範囲であったことが『心魂の歓喜』などより窺える<sup>(6)</sup>。またトゥメンは、州全体を網羅していたわけではなく、人口調査が行われた地域に限られていただろう。

諸史料および先行研究によりトゥメンが存在したことが明らかな諸州

## 二つの「ディーワーン」

は、本稿末尾の地図中の州名に網掛けが施された州である。トゥメンはイラン地域の北東部から北西部にかけて分布していた。モンケ治世末までに、整理・設定された王族の「分地分民」などの権益は、これらの州に存在したと考えられる。

なおこれらのトゥメン分布地域のほかに、『世界征服者の歴史』は、先述のとおりアッラーン州でも人口調査とクプチュル税の設定が行われたと伝える。同書の著者アターマリク・ジュワイニーは、阿母河等処行尚書省の財務長官 (šāhib-dīwān) であった父バハー・アッディーンと共に出仕し、カアン of 宮廷を訪れた経験も持つ人物であり、当時の人口調査の進行状況に通じていた。そのためアッラーン州も、人頭税クプチュルと分地分民の対象地域に含まれていた可能性がある。

それでは後にイルハン国版図となるイラン地域のうち、上述のように阿母河等処行尚書省により人口調査とトゥメン設定が行われ、1256 年の分地分民の対象となった地域に比べ、フレグの西征の征服地と、フレグに伺候して支配権を認められた地方政権の支配地は、どのように支配されたのだろうか。

【表 1】イラン地域のトゥメン一覧

州 (wilāya)	数	トゥメン名 [数] (都市数)
イラク・アジャム	9	イスファハーン [2]、レイ (後にワラーミン (warāmīn) が首邑となる)、カズウィーン、スルターニヤ (9)、クム・カーシャー、大ルル、小ルル、ハマダーン (5)、ヤズド (3)
アゼルバイジャン	9	タブリーズ [2] (3)、アルダビール (2)、ミーシュキーン (Mīshkīn, Pīshkīn) (7)、ホイ (Khūy) (4)、サラウ (Sarāw)、マラーガ (4)、マランド (Marand)、ナフチワーン (Nakhchiwān) (5)
大アルメニア	1	アフラート
マーズンダラーン	7	ジュルジャー (Jurjān)、ムールースターク (Mūrūstāq)、アスタラーバード、アムルとルスタムダー、ディヒスターン、ルーガド (Rūghad)、スィヤーフ・ルスターク (Siyāh Rustāq)

ホラーサーン	ヘラート地域	9	ヘラート、イスフィザール (Isfīzār)、フーシャンジュ (Fūshanj)、バーハルズ (Bākharz)、バードギース (Bādghīs)、ジャーム、チシュト (Chisht)、ハーフ (Khwāf)、ザーワ (Zāwa)
	ニーシャープール地域	2	ニーシャープールとトゥース、パイハク
グルジスターン		9	アニ、他

## 2. モンケ・カアン治世に人口調査が行われなかった地域

イルハン国の成立事情について、第7代ガザン・ハンの命令により14世紀初めに編纂された『集史 *Jāmi' al-Tawārīkh*』「モンゴル史」は、イラン地域は、モンケの命令によりフレグに帰属し、フレグ家の直属領 (injū) であると伝える。筆者は、拙稿 (2009) において、この『集史』の記述が、歴代カアンと4王家のイラン地域における権益が、1370年代の第2代アバガ・ハン治世まで保持されていたという当時の実態とは矛盾し、フレグ家によるイラン支配を正当化する論理のもとに記されていることを呈示した。またジュチ家、チャガタイ家、オゴデイ家のイラン地域における権益の情報を整理し、1270年にチャガタイ家の9代宗主バラクがホラーサーン州へ進軍し、アバガの軍隊と対戦し敗走した後に、名実共に「イランはあたかもフラグ家の私領の如き様相を呈するに至った」(北川1977: 68) ことを裏づけた。

前章で検討したとおり、人口調査にもとづき王族の権益が定められた地域は、イラン地域の北東部から北西部にかけて分布していた。本章では、フレグの西征により新たに征服された地域と、フレグに伺候して支配権を認められた地方政権の支配地を具体的に確認し、それらの地域の支配体制を明らかにする。1256年初頭にイラン地域に到着したフレグの西征軍は、同年、イラク・アジャム州のアラムートのニザール派教主居城を陥落させ、1258年にバグダードのアッバース朝カリフ政権を滅ぼし、続けてイラク・アラブ、ディヤール・ラビーア、シャバーンカーラなどの諸地方の主都を征服した。そしてその過程で、キルマーン、ファールス、ディヤー

## 二つの「ディーワーン」

ル・バクル、ルームなどの諸地方の支配者達がフレグのもとに伺候し、支配権を認められた。

モンゴルは、チンギス・ハン以来、服属国に対して6項目の義務を課した。すなわち①人質の提出（納質）、②軍事協力（助軍）、③糧食やその他の物資の供出（輸糧）、④駅（yām）の設置（設駅）、⑤戸口情報の提出（供戸数籍）、⑥ダルガチの設置（置達魯花赤）である。これらに加えて国王すなわち服属国の支配者の出頭、貢納や租税が課されることもあった（森平 2013）。ダルガチはモンゴル語由来の役職で、漢語史料の「監県・監郡」、ペルシア語史料の *shihna*、*bāsqāq* に相当する（本田 2011c: 104）。本稿では、監督官と表記する。

その一方で、モンゴル中央政府と緊密な関係にありながら、例えば元朝支配下の高麗のように「戸口情報の提出」を免れた王朝の事例も確認される。森平雅彦氏は「戸口情報の提出」の対象外となった高麗の事例が、イラン地域のうち人口調査が行われなかったルームの事例と近似していることを指摘している（森平 2013: 444-45）。それ故、モンゴル支配下のイラン地域でも、すべての地域において一様に人口調査、トゥメン区分、クブチュル税割付が行われたわけではないと考えられる。

通常、モンゴルはある地域や都市を征服すると、降服した人々を集め人口調査を行った。フレグの西征も例外ではなく、いくつかの都市の征服の後に、住人の「数（*shumāra*）を数えて、正税（*māl*）<sup>(8)</sup>とクブチュル税を定めた」（*Jāmi'*: 1005）ことが伝えられている。しかしその一方で、人口調査が行われたという記録のない地域も存在する。そこで本章では、フレグの西征による征服地と、フレグに伺候して支配権を認められた地方政権に対して、どのような支配体制が導入されたのか検討したい。

### (1) フレグの西征による征服地

【イラク・アラブ州と州都バグダード】：バグダードは、1258年のフレ

グ軍による包囲の末に陥落した。そしてアッバース朝カリフが殺害された直後に、新たにバグダードの監督官 (bāsqāq) と財務長官 (ṣāhib-dīwān) が任命された。そしてその翌年 657/1259 年、バグダードの住人が集められて、彼らの名前が記録され、千人・百人・十人毎に長が定められた後、彼らのうち子供と老人以外の人々に、毎年の徴税額が査定された (Hawādith: 243)。すなわち人口調査とクプチュル税と思われる新税導入の礎が築かれたわけである。しかしこの新しい税制は、同年にアラー・アッディーン・ジュワイニーがバグダードの財務長官 (ṣāhib-dīwān) として着任すると、撤廃された (Hawādith: 243)。そしてその後も、バグダードとイラク・アラブ州で、アルグン・アカあるいはイルハンの命令により、クプチュル税が施行された記録はない<sup>(9)</sup>。

一方、672/1273-74 年に、バグダードのタムガ税 (tamghā) の税率が軽減されていることより (Hawādith: 265)、これ以前にタムガ税が課されるようになっていたとわかる。タムガ税は、モンゴルによりイラン地域に導入された商税で、主に都市と郡部の商取引・手工業に課された現金納の税であった。徴税請負による月極の市場税と臨時税が存在し、監察官 (mushrif) の査定により課税された (本田 1991b: 325-32; 渡部 2013)。

【シャバーンカーラ地方】：イラン南部のファールス州とキルマーン州に隣接する地域で、1260 年にフレグの遠征軍により征服された (Majma': 164-66; 渡部 2007: 52)。「住人のうちの一団が、人質として (フレグ) の宮廷の御前に向かい、皆、人数 (shumāra) を数えられ、関税 (bāj)、地租 (kharāj)、クプチュル税、他の諸々の賦課を負った」 (Shāhī: 172)。しかしシャバーンカーラ地方自体で、アルグン・アカあるいはイルハンの指示により人口調査とクプチュル税が施行された形跡はない。その後、5代イルハン、ガイハト治世 (在位 1291-1295) に、タムガ税が導入された (Majma': 174)。



## 二つの「ディーワーン」

【ディヤール・ラビーア州】：同地方からは、1252年に、カイロのアイユーブ朝が任命した都市マイヤーファールキーンとアーミドを中心とする地域の支配者（malik）と、同じくマールディーン一帯を支配していたアルトゥク朝の支配者が、実子をモンケの宮廷に派遣した（Väth 1987: 150）。しかし彼らはモンゴルに臣従したわけではなく、フレグ軍による侵攻の対象となった。マイヤーファールキーンとアーミドは、フレグの第3子ユシムトの軍隊により1259年に陥落した。またマールディーンのアルトゥク朝は籠城戦の後、1260年にモンゴル軍に投降した。ただしこれらの都市が征服された際に、人口調査とクプチュル税が施行された記録はない（*Jāmi'*: 1035-40; Humphreys 1977: 333-66; Väth 1987: 151-60）。

その後、アルトゥク朝の支配者は、フレグによりマールディーンの国の支配を委託され（*Jāmi'*: 1040）、アバガ・ハン治世にはディヤール・ラビーア州全体の支配を任された（*Jāmi'*: 1062）。モンゴル支配下のアルトゥク朝には地租（kharāj）、商税（maks）、タムガ税に相当する可能性のある「請負による市場税（qamāna）」などの税が存在した（Väth 1987: 203-205）が、イルハン国期に人口調査にもとづくクプチュル税が課され始めたかどうかは、なお検討の余地を残すため、今後の課題としたい<sup>(10)</sup>。

### (2) フレグにより支配権を認められた地方政権<sup>(11)</sup>

【ファールス州】：モンゴル進軍時には、セルジューク朝のアタベク（師父）の家系であるサルグル朝により支配されていた。同家はモンゴル帝国2代カアン、オゴデイの治世にモンゴルに臣従した。アタベク、アブー・バクル（在位1226-1260）は、カアンの宮廷に甥を人質として送り（①人質の提出）、地租と税（iltizām-i kharāj wa itāwa）の義務と監督官（shihna）を受け入れた（⑥ダルガチの設置）（*Waṣṣāf*: 156-57）。また甥をフレグのバグダード包囲に従軍させ（②軍事協力）（*Waṣṣāf*: 183）、随時、貢納や糧

食の提供を行っていた（③糧食の供出）。1258年には、バグダードの戦勝祝いのためにアタベクの子サアドがフレグのもとに伺候し（*Jāmi'*: 1023）、質子となった（*Waṣṣāf*: 180）（①人質の提出）。

またアブー・バクルはモンゴルの支配下に入ると、ファールス州の税制改革を行い、州都シーラーズとその周辺で家畜税、商税等を課す命令を発した。私有地については、その所有者と耕地により異なる率の地租を課し、通常の耕地では土地面積に応じて一定額が徴収される課税方法ミサーハ（*misāha*）、シーラーズ周辺の村では特に穀物の収穫高による課税方法ムカーサマ（*muqāsama*）により決定し、アタベクの国庫におさめた（渡部 1997）。その後、661/1262-63年にアタベク、サルグル・シャーが反乱を起こすと、フレグの家臣（*amīr*）、アルタジュの軍隊が派遣され、アタベクが捕えられ処刑された。

その後、フレグによりアブー・バクルの娘アビシュ（在位 1263-82）が後継者に任命され、シーラーズに監督官（*shihna*）が任命された。665/1266-67年には、イルハン国中央より派遣された書記が年税（*amwāl*）を徴収し、667/1268-69年に2代アバガ・ハンが即位すると、アバガの家臣（*amīr*）、アンキヤヌがファールス州の支配を命じられた（Lambton 1987）。670/1271-72年には、アバガの家臣（*amīr*）、スンジャクと、財務長官シャムス・アッディーン・ジュワイニーが任命した大書記（*ulugh bitikchī*）がファールス州を訪れ、翌年より徴税請負制（*muqāṭa'a*）が導入された（Lambton 1987; 渡部 1997）。これを機に、ファールス州はイルハン国の中央ディーワーンの管理下に組み込まれたが（*Guzīda*: 507）、アルゲン・アカあるいはイルハンにより人口調査とクプチュル税が施行された記録はない。ただガザン・ハン治世に起きた 699/1299-1300 年のシーラーズ一帯の大飢饉に際し、「規定のクプチュル税（*qūbchūr-i muqarrarī*）」以外は徴発しないようにとの命令が発せられているため（*Waṣṣāf*: 362; Lambton 1986: 90）、13 世紀末時点では、シーラーズにクプチュル税が課

## 二つの「ディーワーン」

されていたことを確認できる。ただこのクプチュル税が人口調査に基づく人頭税を指すのかどうかは明確ではない<sup>(12)</sup>。また『心魂の歓喜』によると、イルハン国末期には、ファールス州の諸都市にタムガ税が課されていた (*Nuzhat*: 113)。

【キルマーン州】：同地方を支配していたカラキタイ政権クトルグハン朝のスルターン、バラク・ハージブは、オゴデイ・カアン<sup>(13)</sup>の宮廷に使節を送り、貢納を行い、王子を人質として供出し (①人質の提出)、王女をチャガタイに嫁がせた (*Simṭ*: 25-26)。またバラク・ハージブを継いだスルターン、ルクン・アッディーンはモンケ・カアン<sup>(14)</sup>の宮廷に自ら出向き (国王の親朝)、キルマーンの支配権 (*salṭana*) を承認され、「正規の本税と規定の税の算定 (*istikhrāj-i māl-i muqarrar wa itāwa'-i muqarrar*) のために」、監督官 (*bāsqāq*) を受け入れた (*Simṭ*: 32; *Waṣṣāf*: 289) (⑥ダルガチの設置)。そしてフレグ西征時には、当時のスルターン、クトブ・アッディーンが糧食を携えて、アラムート城砦包囲中のフレグのもとに馳せ参じ (国王の親朝、③糧食の供出)、監督官 (*bāsqāq, shihna*) を受け入れた (*Simṭ*: 35, 37-38) (⑥ダルガチの設置)。

その後もキルマーン州の財務は、クトルグハン朝の歴代スルターンと同朝のディーワーンの管理下に置かれていた。15世紀のティムール朝期の史書は、3代イルハン、アフマド (在位 1282-84) が、即位直後に、新しいスルターンを任命して、タムガ税とクプチュル税と家畜税の施行を命じたと伝えるが (*Zubdat*: III, 68)。しかしこの新スルターンの治世は、クトルグハン朝の王室内の争いにより長くは続かず、またイルハン国期のキルマーン地方の年代記には、アフマド治世にキルマーン州に人頭税としてのクプチュル税とタムガ税が導入されたという記録はない。そのため、この時にクプチュル税が導入されたという確証はなく、仮に導入されたのだとしても存続したのかは定かでない。またキルマーンの年代記によると、4

代イルハン、アルグン治世（在位 1284-1291）には、都市のタムガ税が課されるようになり、さらにキルマーン州の諸税の歳入原簿の情報がイルハン国中央ディーワーンに提出され、スルターンが徴税請負（muqāṭa'a）を委託されるようになった（Simt: 57, 59）。その後、13 世紀末から 14 世紀初めにイルハン国の宰相であったラシード・アッディーンがキルマーンの都市バムに宛てた書簡において、キルマーンの「カランとクブチュル」に言及しており（Lambton 1987: 90）、ガザン治世にはキルマーン州にクブチュル税が導入されていたと考えられる<sup>(13)</sup>。

【ルーム州】：同地方を支配していたルーム・セルジューク朝は、1240 年代よりジュチ家とイラン北東部に駐屯した武将 Cholmağın 指揮下のタマ軍の影響下に置かれ、貢納を納めていた。その後、スルターン、イッズ・アッディーン（イブズ・アッディーン）の弟ルクン・アッディーンが第 3 代グユク・ハンの即位式に参列し、支配権を承認されたのをきっかけに、モンゴル本土のカアンに服従（il）した（井谷 1980）。モンケ・カアン治世には、先述の森平氏も指摘していたように、タマ軍に対する貢納による困窮をカアンに訴え、ルームにおけるタマ軍の長達の使節往来と人口調査（sar-shumāra）が禁じられ、クブチュル税は施行されなかった。ただしルームには断事官（yarghūchī）が任命された（⑥ダルガチの設置）。

その後、スルターン位をめぐり兄と対立するようになったルクン・アッディーンは 1257 年にフレグに拝謁し、ルーム地方の支配を認められた。さらにバグダード陥落後には、スルターン兄弟は、それぞれフレグに伺候し、ルーム地方の二分統治を認められ、シリア遠征に従軍した（②軍事協力）。両者のルームへの帰還後、フレグは遠征時の借財返還と貢納として、正税（māl）を求めた（Musāmarat: 65）。それを拒んだイッズ・アッディーンは東方へ逃走し、1261 年にルクン・アッディーンが唯一のスルターンとなった（井谷 1980）。

## 二つの「ディーワーン」

その後、2代アバガ・ハン治世1277年に、イルハン国中央ディーワーンの財務長官シャムス・アッディーン・ジュワイニーによりルーム州にタムガ税が導入されたが（井谷1987; *Jāmi'*: 1104）、それ以降も人口調査とクプチュル税導入の形跡はない<sup>(14)</sup>。「はじめに」で指摘したとおり、C. Melville もクプチュル税は施行されなかったという見解を呈示している（Melville 2009: 80）。

【ディヤール・バクル州】：モンゴル進軍時には、セルジューク朝のアタベク家ザンギー朝の家臣であったバドル・アッディーン・ルウルウ（在位1234-1259）がモスルを中心とする地域を支配していた。『世界征服者の歴史』によると、モスルは、オゴデイ・カアンの寡婦であった監国ドレゲネと3代グユク・ハンの治世に、阿母河等処行尚書省の長官の管轄地域に入った。バドル・アッディーンはグユク・ハンの即位式に使節を派遣している（*Jahāngushāy*: I, 205）。またホラーサーン州の州都ヘラートの年代記『ヘラート史記』によると、アルグン・アカは、646/1248-9年に人口調査のためにディヤール・バクル地方にアミールを派遣している（*Harāt*: 175）<sup>(15)</sup>。しかし当時、モスルは、アイユーブ朝によりシリア地方の都市アレppoに任命されていたマリク・ナースイルの支配下にあったため、モンゴルに対して納税免除を申告した（Patton 1991: 55-58）。

その後、バドル・アッディーンの子がフレグのバグダード包囲に従軍し、1258年にバグダードが陥落すると、バドル・アッディーン自身がモンケ・カアンの命令によりフレグに拝謁した（*Jāmi'*: 1022-23, 1026; Patton 1991: 60）。その後も両父子はディヤール・ラビーア地方のイルビルヤアーミドなどの諸都市の征服に参加し、援軍を送っている（*Jāmi'*: II, 1021-22, 1026）（②軍事協力）。バドル・アッディーンの死後、彼の子マリク・サーリフはマムルーク朝スルターンのもとに逃れ、モスルとアッバース朝カリフ領の奪回のために再びイランに戻りフレグ軍と対戦したが、

1262年に降服して処刑された。その後、モスルにはモンゴルのアミールと知事が任命され、イルハン国の直接支配が始まった。モスル征服時の人口調査とクプチュル税導入の形跡はないが（*Jāmi'*: 1040-43; Patton 1991: 73-80）、J. Kolbas は、タムガ税がフレグの西征時より課されていたと考察している（Kolbas 2006: 180）。

以上の情報をまとめると、フレグの西征による征服地と、フレグに伺候して承認された地方政権の支配地域に共通している点は、アルゲン・アカあるいはイルハンによる人口調査およびクプチュル税施行の形跡がなく、正規のクプチュル税徴収の記録がガザン治世まで確認されないことである。その一方で、これらの地域では、貢納、地租、タムガ税<sup>(16)</sup>などの様々な賦課が課されていた。本章で呈示した叙述史料が伝える各地域の情報は断片的ではあるものの、Kolbas がモンゴル支配期イラン地域の貨幣研究を通して呈示したクプチュル税、タムガ税、地租の納税のために用いられた貨幣の鑄造地域の分布と矛盾していない（Kolbas 2006: 180, 201）。したがって、上述のような傾向が存在したことは確かだろう。

それではなぜ、アルゲン・アカも、フレグも、これらの地域で人口調査を行わなかったのだろうか。特にバグダードのクプチュル税が施行直後に撤廃されたことは、何を意味しているのだろうか。アラー・アッディーンをバグダードの財務長官に任命したのはフレグである。そのためクプチュル税撤廃には、フレグの意向も反映されていたはずである。当時、シリア地方に遠征中であつたフレグは、1260年3月頃に東方から帰還した使節より前年夏のモンケの訃報を受け、6月に大アルメニア州に帰還した。そしてクビライとアリク・ブケのカアン位継承をめぐる対立により、帝国中枢部が混乱状態に陥っているとの報告がフレグにもたらされ、フレグはイラン地域に残留した。そしてこの頃、遠征に従軍していたジュチ家の王子達が次々と亡くなり、1261-63年のフレグとジュチ家5代宗主ベルケ（在

## 二つの「ディーワーン」

位 1257-66) の対戦を招く。

ここでフレグの遠征に参加したジュチ家とチャガタイ家の王子達の動向を確認すると、彼らは 1256 年のニザール派のアラムート城包囲と 1258 年のバグダード包囲に、主要な戦力として参加している。そして各地で得られた戦利品を集めた収蔵庫が造られた際にも、戦利品の一部がモンケ・カアンとジュチ家宗主ベルケに送られた（高木 2009）。しかしその後、ジュチ家とチャガタイ家王族がバグダードとイラク・アラブ諸州において何らかの権益を獲得したという記録は存在しない。また本章で確認したバグダード以外のフレグ軍の征服地、フレグに臣従した地方についても、4 王家が何らかの権益を獲得した形跡はない。

前章で確認したことを踏まえると、1259 年のバグダードの人口調査とクブチュル税の割当は、カアンによる分民などの権益の設定を前提として行われたはずである。すなわちクブチュル税の撤廃は、バグダードにおいて人口に基づく税の徴収と分民の設定が見送られたことを意味している。このバグダードにおけるクブチュル税の撤廃という出来事は、長期的には、モンゴルがイラン高原の農耕地帯を支配していく過程で、征服地の実態に即して自分たちの伝統的な税制、財産分配の方法を変革していった一齣とみなすことができるだろう。しかし同時に、モンケ・カアン死後の政治的混乱とフレグのイラン地域残留、古くからイラン地域に影響力を有したジュチ家とフレグの対立という一連の政治的要因がもたらした結果であったと考えることも可能だろう。

さらに 14 世紀初頭に編纂された『集史』「ガザン・ハン紀」には、「(中央) ディーワーンの諸税がクブチュル税とタムガ税であるイラク・アジャム州とアゼルバイジャン州と諸州」(*Jāmi'*: II, 1415) という記述が存在する。またバグダードとシーラーズの国 (*mulk*)、すなわちイラク・アジャム州とファールス州の首邑地域が「(中央) ディーワーンの諸税が収穫物 (*irtifā'āt*) と現金 (*wujūh al-'ayn*) から成り、諸税の大半が収穫物の査定

(ḥarz) と算定 (muqāsama) により徴発されていた諸州」であったとも伝えられている (Jāmi': II, 1442-44)。前者のイラク・アジャム州とアゼルバイジャン州は、モンケ・カアン治世 1256 年までに、人口調査、トゥメン設定、クプチュル税導入が進められた代表的な地域である。一方、後者のイラク・アジャム州の首邑バグダードとファール州の首邑シーラーズの一帯は、それぞれフレグの西征時に征服された地域と、フレグに伺候し支配を認められた地方政権の支配地である。両地域では、モンゴル支配以前からの伝統的な税額査定、算定方法による現物納および現金納の地租 (kharāj) と、フレグの征服後に導入されたタムガ税が、主要な国税であったと考えられる。モンケ治世までに人口調査が行われ正規のクプチュル税が導入された地域と、正規のクプチュル税以外の諸税が課された地域は、数十年の時を経てもなお大きくは変わらなかったのである。

13 世紀末に即位した第 7 代ガザン・ハンは、先述のとおり、697/1297-98 年に、一連の「税制改革」の一環として、全国的に「正税 (māl) を定め、地租 (kharāj)、クプチュル税を設定した」(Waṣṣāf: 347)。その一方で、本田氏が注目しているとおり、同時期に、「イラク・アジャム州の諸国の大半は、(ガザン治世以前の) クプチュル税の設定のために荒廃してしまっており、カズウィーンでは金曜日の集団礼拝が成立しなかったほど、住人は祖国から移り住んでいた。ハージャ・サドル・アッディーンは諸都市からクプチュル税を撤廃し、タムガ税を設定した」(Guzīda: 604)。この都市部におけるクプチュル税の撤廃は 696/1296-7 年あるいはその直後のことであり、都市部においてタムガ税が課されたのに対し (本田 1991b: 325-26)、郡部にはクプチュル税が課され、イルハン国末期には全国的にクプチュル税の課税が減少し、タムガ税の重要性が増していった傾向が財務術指南書などより確認されている (渡部 2011; 渡部 2013)。

それでは次章以降、モンケ・カアンの死後、フレグ家のイラン支配が確立していく様子を、イルハン国の中央ディーワーンの確立とイルハン国期



の阿母河等処行尚書省に焦点を絞り考察する。

### 3. イルハン国の中央ディーワーンの起源

#### 3-1. フレグによる粛清

前述のように、フレグの西征に参加していたジュチ家の王子達は1260年までに相次いで亡くなり、ジュチ家の軍隊の一部はイルハン国の北境を超えてジュチ・ウルス領域へ帰還し、ほかの軍隊はイルハン国の東境と西境を越えて逃走した。その後、1261-63年にかけてフレグ軍とジュチ家の5代宗主ベルケの軍は数回にわたり対戦した。フレグは、1262年秋に、自ら軍隊を率いて北上する途上で、複数の官僚を捕えて処刑した。従来の研究では、この一連の粛清の原因は不明とされている (Aubin 1995: 21)。

フレグは、1260-61年頃に、兄クビライ・カアンによりイラン地域の支配と遠征軍の統括を承認された。しかしその一方で、フレグが遠征に出立する際に、代理としてモンゴル本土に残したフレグの次子ジュムクルは、1264年初めまでアリク・ブケと行動を共にしていた。すなわち1262年末時点では、フレグはクビライ支持に傾いていたが、アリク・ブケとの関係が完全に断絶していたわけではない (高木 2009: 141)。

そのような状況下で、フレグの遠征軍に対する影響力は実質的に強まりつつあった。例えばモンケ・カアンの生前には、フレグは4王家が派遣した混成駐屯部隊である二つのタマ軍の万戸長の任免、処罰について、基本的にモンケの判断を仰ぎ、彼の勅令に従って遂行していた (高木 2009: 145)。しかしモンケの死の報告を受けた後である1261年には、フレグは自らチョルマグンのタマ軍の万戸長の処刑を命じ、その配下の諸千戸を他の武将達に割当てており、タマ軍万戸長と軍隊の任免・処分権を獲得していた<sup>(17)</sup>。1262年末の粛清は、このようにフレグが自らの支配権を行使し始めた時期に起きており、フレグ自身の意志により遂行されたと考えられる。

この肅清の対象者達は、【表2】の6名である。1262年11月20日に(1)(2)(3)の3名の官僚が処刑され、続けて11月22日に(4)の官僚が処刑され、(5)(6)の官僚2名が杖刑に処された(*Jāmi'*: II, 1045)。

【表2】フレグによる肅清の対象者

	人名	経歴	刑
1	アミール・サイフ・アッディーン	モンケ個人に属す宰相。	処刑
2	ハージャ・アズィーズ	グルジスタン州総督(wulāt)の1人。州都ティフリスの徴税官。	処刑
3	マジュド・アッディーン・タブリーズ	ジュチ家ベルケの書記(dabīr)。モンケ治世：タブリーズの人口調査を担当。フレグ西征中：戦利品管理を担当。	処刑
4	フサーム・アッディーン・ムナッジム	占星術師。モンケの命令でフレグの遠征に同伴。	処刑
5	サドル・アッディーン・タブリーズ	グユク治世とモンケ治世：アッラーン州とアゼルバイジャン州支配。	杖刑
6	ナースイル・アッディーン・アリーマリク	グユク・治世：トルイの寡婦ソルカクタニ・ベキに属すアルゲン・アカの仲間(sharīk)。モンケ治世：ホラーサーン州のニーシャープールとトゥースのトゥメンとイラク・アジャム州のイスファハーン、クム、カーシャーンの諸トゥメン支配。	杖刑

### (1) アミール・サイフ・アッディーン

サイフ・アッディーンはフレグの西征に随行し、ニザール派の城砦包囲について、モンケがフレグの西征軍の先鋒部隊指揮官に任じたキトブカと共にフレグに進言した人物で、バグダード包囲の際もフレグの中軍に従い、影響力のある官僚であった(*Jāmi'*: 988, 1009)。

彼は、『世界征服者の歴史』によると、年長者に対する尊称「アカ(aqa)」を付されており、「大いなる長官(ṣāhib-i 'aṣam)」「最強の重臣(rukn-i aqwā)」(*Jahāngushāy*: III, 105, 113)と記されている。また『集史』でも「書記(bitīkjī)」、「国家の管理者(mudabbar-i mamlaka)」(*Jāmi'*: 988)、「khāṣṣの宰相(wazīr)」(*Jāmi'*: II, 1009)と記されている。khāṣṣは、支配者個人の財産や支配者個人に関係する事物に付されるアラビア語の単語であり、その財産・事物自体を指す場合、あるいは支配者個人の財産を管理

## 二つの「ディーワーン」

する職務・機関に付される場合などがある (Orhonlu 1981)。

従来の研究では、彼がフレグに属した (Aubin 1995)、あるいは彼と共に処刑されたマジュド・アッディーン・タブリーズと同様にジュチ家宗主ベルケに属したという見方が呈示されている (Khosrowbīgī 1391)。しかし先に引用した『世界征服者の歴史』の記述とは別の箇所によると、彼は、モンケ・カアンの「御前の諸柱のなかでも強固な柱であった (az urkān-i ḥadrat-i ruknī wathīq būd)」人物で、カアンの重臣中の重臣であったという (*Jahāngushāy*: I, 35)。さらに 1310 年代末に『集史』にもとづいて執筆された『バナーカティー史』では、上述の『集史』の役職名に、さらに「カアン (qān)」という単語が加わり「カアンの khāṣṣ のワズィール」と伝えられている (*Banākātī*: 424)。この『バナーカティー史』の解釈が正しいとすれば、この箇所のカアンは、サイフ・アッディーンがフレグの遠征以前より仕えていたモンケを指し、サイフ・アッディーンは、モンケによりフレグの西征に従軍した宰相・書記 (bitīkchī) であったと考えられる。モンケ個人の権益を管理する宰相であった可能性があるだろう。

### (2) ハージャ・アズィーズ

彼はグルジスタン州の総督 (wālī)、州都ティフリスの徴税官であった (北川 1983)。グルジスタン州は、阿母河等処行尚書省長官のアルゲン・アカが人口調査と諸税の割付けを行った地域であり、彼はカアンあるいはある王族の所領の徴税官に任命されていた可能性がある。彼と共に殺害されたマジュド・アッディーン・タブリーズ同様に、ジュチ家宗主ベルケに属したという見方もある (Khosrowbīgī 1391)。

### (3) マジュド・アッディーン・タブリーズ

彼はジュチ家宗主ベルケの書記 (dabīr) で、フレグとベルケの対立が影響して、処刑されるに至ったと考えられている (北川 1998: 79; Khosrowbīgī

1391)。彼は、モンケ治世にアゼルバイジャン州の州都タブリーズの人口調査、千戸設定、クプチュル税の割付に任命された (*Jahāngushāy*: II, 258)。つまりジュチ家宗主に属す書記として、古くからジュチ家の影響下にあったアゼルバイジャン州の人口調査に携わったと考えられる。またフレグ軍によるバグダード征服後には、各地より集められた戦利品の収蔵庫を建築しており (*Jāmi*': 1022; 北川 1998)、ベルケの取り分も管理していた可能性がある (高木 2009)。

#### (4) フサーム・アッディーン・ムナツジム

彼は、バグダード包囲の際に、バグダードを攻略すると災いが起きると奏上し、そのことを確証する誓詞を提出したが、実際には何ら災いは起こらなかったため、叱責を受けた。彼は、「モンケ・カアンの命令により下馬や出発の日を選定するために」、フレグに同伴した人物であった (*Jāmi*': II, 1006)。

#### (5) マリク・サドル・アッディーン・タブリーズ

彼は、グユク治世よりアルゲン・アカに従い、アゼルバイジャン州とアッラーン州の支配を命じられた。またモンケ治世には、上述のマジュド・アッディーンと共に人口調査、トゥメン区分、クプチュル税の設定を行った (*Jahāngushāy*: II, 248, 255)。さらに 659/1260-61 年にはフレグの命令により、1 万戸の軍隊を率いて、モスル包囲に参加している (*Jāmi*': II, 1041)。彼は、阿母河等処行尚書省とアルゲン・アカ個人と馴染みの人物であった。杖刑を受けた後に赦免され、再びタブリーズの支配をゆだねられた (*Jāmi*': II, 1049)。

#### (6) ナースイル・アッディーン・アリーマリク

彼は、トルイの寡婦ソルカクタニ・ベキに属すアルゲン・アカの仲間

## 二つの「ディーワーン」

(sharīk) として阿母河等処行尚書省に出仕していた (*Jahāngushāy*: II, 218-19)。『世界征服者の歴史』を典拠とした『集史』には、「ソルカクタニ・ベキと王子達 (shāhzādagān)」、すなわち恐らくはトルイの王子達であるモンケ、クビライ、フレグ、アリク・ブケと庶子達に属したと記されている (*Jāmi'*: 660)。彼と同時期にソルカクタニ・ベキに属す書記として阿母河等処行尚書省に出仕していたスィラージュ・アッディーン・シュジャーイーは、ソルカクタ・ベキの死後は、彼女の末子アリク・ブケに属した (*Jahāngushāy*: II, 256)。それ故、ナースィル・アッディーンもまた、ソルカクタニ・ベキの死後はアリク・ブケあるいはトルイの息子達に属した可能性がある。

モンケが即位すると、彼はモンケの勅令により「(ホラーサーン州の) ニーシャープールとトゥースのトゥメンと (イラク・アジャム州の) イスファハーンとクムとカーシャーンの諸トゥメン」の支配を委託された (*Jahāngushāy*: II, 255)。杖刑に処せられた後、赦免されたが、上述のサドル・アッディーンとは異なり、職務に復帰することはなかったようである。

以上より、1262 年末の一連の粛清は、マジュド・アッディーンのようにジュチ家と関わりの深い官僚の排斥を目的としたという従来の見解の妥当性が改めて確認された。また同時に注目すべき点は、粛清の対象となった人物が、モンケ治世以前より阿母河等処行尚書省と関係があり、モンケ治世も職掌を得た人物、あるいはモンケのもとからフレグに同行するように派遣されたと考えられる人物であることだ。フレグは、モンケの死後にイランに残留した結果、ジュチ家勢力に加え、王族の権益を管轄していた阿母河等処行尚書省の関係者を排斥したと考えられる。またモンケ・カアンと縁の人物が殺害された点も注目に値する。

### 3-2. フレグの支配領域

『集史』「フレグ紀」には、1263年のフレグとジュチ家との対戦の記述より後の箇所に、フレグがモンゴル王族、家臣、地方政権の君主、地方の有力者をイラン地域の各地に任命する記事が存在する（*Jāmi'*: 1049）（本稿末尾の【表3】参照）。ただこれらの任命と支配の承認は、実際には一斉に行われたわけではなく、各地域が征服された際に、フレグの家臣（*amīr*）が任命され、地方政権の支配者はフレグに拝謁した際に支配権を承認されたのであろう。例えばアラー・アッディーン・ジュワイニーがバグダードに任命されたのは、前述のとおり1259年であった。また彼の兄弟シャムス・アッディーンは、1262年に処刑された前述のアミール・サイフ・アッディーンの後任として、「諸国の財務長官（*ṣāhib dīwān-i mamālik*）」に任命されたので、1262年末以降に着任したと考えられる。

この記事より、フレグが家臣を任命した地域および地方政権の支配者による統治を承認した地域は、先述のサドル・アッディーンの任地タブリーズをのぞいて、フレグ軍による新征服地であるイラク・アラブ、ディヤール・ラビーア州、そしてフレグに臣従した地方政権<sup>(18)</sup>が支配していたファールス、キルマーン、ルーム州に相当することが判明する。これらの地方は、阿母河等処行尚書省により人口調査が行われた地域およびトゥメンが設定された地域とは重ならない。

またフレグは、阿母河等処行尚書省の長官アルゲン・アカおよび官僚を任命しておらず、彼には行尚書省の人事の任免権はなかったと考えられる。『集史』は、フレグの長子である2代アバガ・ハンが即位した際に、「諸国の請負人（*muqāṭa'-i mamālik*）であったアルゲン・アカを変わず（*bar qarār*）任命した」と伝えている（*Jāmi'*: 1061）。またイルハン国末期の1330年代に執筆された『選史 *Tārīkh-i Guzīda*』によると、「フレグ・ハンがイランに來た際、依然としてアルゲン・アカの名において統治（*ḥukūmat*）があり、彼はアバガ・ハンの治世に死去した」（*Guzīda*: 584）と伝える。

## 二つの「ディーワーン」

この『選史』の記述にもとづき、かつて岩武昭男氏は、アルゲン・アカは、1275年5-6月にホラーサーンのラードカアンの牧地で亡くなった時点まで（*Jāmi'*: 1099）、阿母河等處行尚書省の長官の地位にあったと考察し<sup>(19)</sup>、「イルハン政権は同省との二重政権として成立した」という卓見を示したが（岩武2001: 53）、フレグが行尚書省の役人を任命していないことは、この見解の妥当性を示している。モンケが任命したアルゲン・アカをはじめとする阿母河等處行尚書省の官僚達は、モンケの死後も、彼の勅令のもとに職務を遂行していたのだろう。

またフレグ自身の滞在地、そしてフレグの年長の王子達、長子アバガと第3子ユシムトの任地は、モンケが4王家の分地分民を設定した地域と重なる。フレグは、1261年と1262年に大アルメニア州のアラタグ（*Alātāgh*）で夏営し、1263年と1264年にアゼルバイジャン州のマラーガおよび *Jaghātū* で冬営している（本田1991e: 359-60）。そしてアバガの任地はイラク・アジャム、マーザンダラーン、ホラーサーンの諸州で、ユシムトの任地はアッラーンとアゼルバイジャンの諸州であった。その後、フレグが死去した際には、アバガはマーザンダラーン州の冬営地に居り、一方のユシムトはジュチ家支配領域との境域であるダルバンドとアッラーン州に滞在していた（*Jāmi'*: 1058）。ユシムトの滞在地の北境は、ジュチ家との対戦を経て北上したと考えられる。両王子の任命の目的は、彼らとその一族・家臣と軍隊の牧地の設定に加え、イルハン国のほかの治世と同様に、中央アジアのチャガタイ家およびオゴデイ家をはじめとする勢力とコーカサス地方以北のジュチ家の支配領域と接する国境地帯の防衛のためであったろう（Spuler 1985: 282-99）。また任命先の地域や近接地域には、王子達の分地分民が設定されたと考えられる<sup>(20)</sup>。ただ少なくともフレグの治世中には、フレグと彼の王子達は、彼らの滞在地を独占的に所有していたわけではなく、これらの地域の4王家の権益は保持されていた。

例えば、ジュチ家のイラン地域の権益は、先述のジュチ家勢力のイラン

地域からの逃走と、1261-1263年のフレグとベルケの対戦を経て一時的に凍結され、その収益は恒常的には受け渡されなくなった。ただ1316年に、ジュチ家9代ハン、ウズベクが、8代イルハン、オルジェイトに使節を送り、モンケ・カアン<sup>21</sup>の勅令にもとづき収益の授与を要求し、快諾されている（高木2009）。またチャガタイ家とオゴデイ家については、それぞれの王家の宗主バラクとカイドゥが、1266-67年の冬に、トルキスタンのビシュバリク等処行尚省の長官マスウード・ベクをアバガ・ハンのもとに派遣し、イラン地域の「諸々の私財（*injū*）の会計査定（*raf-i muḥāsiba'*）」を求めている。これに対しアバガ・ハンは急ぎ収入を決算して長官に渡すように命じた（*Jāmi'*: 1063）。またフレグ西征に従軍したチャガタイ家の王子テグデルは、アバガ治世には、グルジスタン州のアララトの山々を夏営地とし、アゼルバイジャン州のナフチワーンを冬営地としていた（北川1977）。このようにイルハン国内には両王家のイラン地域の権益が保持され、チャガタイ家の王子の牧地が存在した（高木2009: 149）。

その他に、フレグは1262年に処刑したアミール・サイフ・アッディーンの後任として、シャムス・アッディーン・ジュワイニーを「諸国のサーヒブ・ディーワーン職（*ṣāhib-dīwān-i mamālik*）」に任命し、諸国の管理、統制（*ḥall wa 'aqd wa tartīb wa ḍabt*）を行わせた」（*Jāmi'*: 1049）。彼が選出された経緯は不明だが、彼の父バハー・アッディーンも、オゴデイ・カアン治世より同じ「諸国のサーヒブ・ディーワーン」として阿母河等処行尚書省に出仕していた。ところでシャムス・アッディーンが「諸国のサーヒブ・ディーワーン（財務長官）」、すなわち「ディーワーンの長官」の職掌に任命されたのは、彼の父バハー・アッディーンが阿母河等処行尚書省で同じ職掌を与えられていたことと無関係ではないだろう。ジュワイニー家は、代々、イラン地域の諸王朝の財務長官（*ṣāhib-dīwān*）を輩出した家系であり、前述のとおり、シャムス・アッディーン<sup>21</sup>の弟アターマリク・ジュワイニー<sup>(21)</sup>もバグダードの「サーヒブ・ディーワーン」に任命された。



## 二つの「ディーワーン」

「サーヒブ・ディーワーン」という称号は、少なくともモンゴル支配期の初めには、J. A. Boyle が指摘したようにジュワイニー家出身者の通称のように使用されていたのだろう (Boyle 1997(1958): xxviii)。

シャムス・アッディーンは、財務長官として、イラン地域の「全州」の財務帳簿を整備し、年度会計を開始した (渡部 2013)。ただフレグによる任命当初は、フレグの西征時の征服地をはじめとして、フレグが支配者の任免権を有した諸州の財政整備を担当していたと考えるのが自然だろう。前章で確認したとおり、彼は 1270 年代にファールス州やルーム州の徴税システムを整備している。すなわち彼が長官 (ṣāhib) となった「ディーワーン」は、父バハー・アッディーンが出仕したディーワーン、阿母河等処行尚書省とは起源と管轄地域、税制を異にする機関であった。この機関が、イルハン国の中央ディーワーン (dīwān-i a'lā) の礎となったのである。イルハン政権は、阿母河等処行尚書省との「二重」政権として成立したというよりは、二つのディーワーンの管轄地域はほぼ分かれ、重なっていなかったのである。

## 4. アバガ・ハン治世の阿母河等処行尚書省

### 4-1. アバガ・ハンの支配領域

フレグの長子アバガは、1264 年の父の死後、マーザンダラーン州から首都マラーガに帰還し、王侯達による協議の末、1265 年に即位した。その後、1270 年に、伯父である元朝のクビライ・カアンからイラン地域の支配を承認されて、正式に即位した (*Jāmi'*: 1097)。

『集史』は、1265 年のアバガの即位式の記事に続けて、アバガ治世中の王侯の地方任命をまとめて伝えているが、実際には一度に各王侯が任命されたわけではない。例えばアバガに代わり、大軍と共にアム河岸までのホ  
ラーサーン州とマーザンダラーン州に派遣されたフレグの第 6 子トブシン  
は、『集史』「部族篇」によると、アバガ即位の 2 年後に任命された

(*Jāmi'*: 209)。彼の任地は、アバガの王子時代の駐屯地域と比べると、イラク・アジャム州が含まれておらず、イルハン国東部の国境地域に移動している。またアバガの弟ユシムトはやはり大軍と共に、フレグ治世より北に位置するダルバンド、シルワーン州とムーガーン州、大アルメニア州のアラタグ方面に任命された。両者の任地範囲の変更は、アバガ・ハン治世のジュチ家およびチャガタイ家バラクの進軍に対し、国境防衛がさらに重要視されるようになったためであり、またイラク・アジャム州がアゼルバイジャン州とともにアバガ自身の直接の支配圏・遊牧圏となったことを意味している。

さらにフレグの後継者決定の協議には、アルゲン・アカも参列し(*Jāmi'*: 1059; *Waṣṣāf*: 53)、前述のとおり阿母河等処行尚書省の長官に再任・留任された。一方、モンケ治世に、アルゲン・アカの代理 (*nā'ib*) に任命されたイッツ・アッディーン・ターヒル・ファルユーマーディーは「ホラーサーンの宰相位 (*wizāra-yi Khurāsān*)」に任命されている。このように宰相の職掌に「ホラーサーン」という地域名が付されていることは、アバガ治世に、阿母河等処行尚書省の実質的な支配領域がホラーサーン州一帯に限定されていったことを示唆していると言えよう。

しばしば言及されるように、『心魂の歓喜』によると、ホラーサーン、マーザンダラーン、クヒスターン、クーミス、タバリスターンの諸州の徴税と会計は、長い間「ホラーサーンの宰相」の管轄する「ホラーサーンの至高なるディーワーン (*diwān-i a'lā-yi Khurāsān*)」内で処理されていた。そしてこれらの諸州の税収はイルハン達に申告されず、その一部はホラーサーン州に駐屯する軍隊の経費に充てられていた。これらの州の会計が中央ディーワーンに報告されるようになったのは、9代イルハン、アブー・サイードの治世 (1316-35 年) であった (*Nuzhat*: 147)。すなわち上述の 5 州が、アバガ治世以降に「ホラーサーンのディーワーン」の直接の管理下に置かれた地域で、阿母河等処行尚書省はイルハン国の東北地方を管轄す

## 二つの「ディーワーン」

るディーワーンとなったのである。これは、クビライが支配権を固めた漠地において、中統3年（1263年）に、燕京行中書省が中央に併合され、その管轄地域が元朝の中書省の直接統治地となったこと（前田1973）と相似している。

さて1270年にチャガタイ家のバラクがホラーサーンに進軍すると、アバガ・ハンは弟達とアルゲン・アカを伴い対戦し、勝利を収めた。そして同年11月に元朝のクビライ・カアンの勅令を得て、正式に帝王位（*pādshāhī*）についた（*Jāmi'*: 1097）。この直後に、ジュチ家6代宗主モンケ・テムルより、アバガの対バラク戦勝利を祝う使節が到着し（*Jāmi'*: 1097）、1270年に、チングス家王族によりフレグ家の支配が受け入れられ、名実ともにイルハン国の支配領域が定まったと言えよう。

### 4-2. 1270年代の人口調査

1270年代には、イラン地域のいくつかの州で人口調査が行われた。『ヘラート史記』は、671/1272-73年と672/1273-74年に行われたホラーサーン州の州都ヘラートの人口調査について伝えている。672年には、大アミール（*amīr al-umārā'*）のスンジャク、またオゴデイ・カアン治世以来、ホラーサーン一帯に駐屯していたタマ軍の万戸長アラドゥ（*Alādū*）の兄弟アフマド、それからホラーサーンの宰相に任命された先述のイッズ・アッディーン・ターヒルの子で、彼の死後に宰相位を継いだワジーフ・アッディーン、そしてマリク・ジャラル・アッディーン・スィムナーンなる人物がヘラートを訪れ、人口調査を行い、住人を4区分した（*Harāt*: 338-39）。ジャラル・アッディーン・スィムナーンは、アバガの長子アルゲンが第4代イルハンに即位すると、「代理（*nā'ib*）、書記（*kātib*）」（*Waṣṣāf*: 229）、「宰相（*wazīr*）」（*Guzīda*: 597）として仕えた人物である。彼の出身地スィムナーンはマーザンダラーン地方に接するクーミスとタバリスターン州に属す都市であり（*Nuzhat*: 161）、アルゲンは、王子時代に

イラク・アジャム州に隣接するマーザンダラーン州に駐屯していた (*Jāmi'*: 1206)。672年の人口調査の際に、すでにジャラルール・アッディーンが王子時代のアルゲンに仕えており、王子アルゲンのもとからヘラートの人口調査に派遣された可能性は十分考えられる。つまり人口調査を担当した4名の人物は、それぞれアバガ・ハン、ホラーサーン地方に駐屯していた旧タマ軍に由来する軍隊、阿母河等処行尚書省、そしてホラーサーン方面に駐屯していた王子アルゲンのもとより派遣され、それぞれの送り主のヘラートにおける分民を得て、徴税権などの権益を所持するようになったと考えられる。

またアルメニア人ステパノスは、アルゲン・アカが、グルジスタン州と大アルメニア州で新人口調査を行ったと伝えており (*Galstjan*: 36; 北川 1998: 83)、この人口調査の実施年は、1273年あるいは1275年であった (*Bayarsaikhan* 2010: 119)。

これらの3州は、いずれもアルゲン・アカが、人口調査、トゥメン区分、クプチュル税の設定を行い、モンケ・カアンにより4王家の分地分民が定められた地域である。特にグルジスタン州は、前述のとおりチャガタイ家テグデルの滞在地であったが、彼は1270年のバラク進軍時に共謀したため、アバガに捕えられ、宮廷に留置された (*Jāmi'*: 1070-71)、バラクの敗走を境に、チャガタイ家・オゴデイ家の王族がイラン地域の私財の会計を請求する記録は伝えられていない。

翻って東方に目を向けると、1276年に元朝により南宋が事実上滅亡した後、江南地域はモンゴルの支配下に置かれ、クビライ・カアンは1281-1285年にかけて一族功臣の江南の分地分民を設定した。村岡倫氏は、1266年にクビライ政権に対して反旗を翻し、中央アジアにおいて自立したオゴデイの孫カイドゥ、1276年に挙兵した先帝モンケ・カアンの子シリギ、そして「シリギの乱」の首謀者であるトルイの庶子ソゲデイの子トク・テムル、「シリギの乱」に呼応し、後にカイドゥの陣営に所属したグ

## 二つの「ディーワーン」

ユク家のホクとトグルクが江南の分地分民の対象からはずされていることを指摘している（村岡 1997: 18）。また同様にカイドウと共にいたチャガタイ家のアルグとバラクの王子達も江南の分地分民の対象となっていないはずであると考察した（村岡 1997: 16）。

これらの見解を踏まえると、1270 年代におけるヘラート、グルジスタン、大アルメニアにおける新たな人口調査は、モンケ治世に定められた 4 王家の分地分民の再整理、再分配のために行われ、恐らくチャガタイ家・オゴデイ家を中心とする王族のイラン地域における権益は縮小化、あるいは実質的に失われ、その一方で、フレグ家、特に当主アバガ・ハンと王子達の権益は相対的に増加したであろうことが推測される。なお前稿で明らかにしたように、1316 年に、ジュチ家のウズベク・ハンが、モンケ・カアンのヤルリゲ（勅令）によりイラン地域に存在するジュチ家の私財収益の引き渡しを求め、14 世紀初めにチンギスの庶子コルゲン家に属すタブリーズの工房が存在したように（高木 2009）、両家の私財は保持されていた。

## おわりに

本稿では、まず、先行研究にもとづき、モンケ・カアンが王族に分与した地域を確定した。次に、フレグの西征による新征服地、およびフレグが支配権を承認した地方政権の支配地では、阿母河等処行尚書省も、フレグも人口調査とクプチュル税の施行を完遂しなかった可能性が高いこと、これらの地域には 4 王家をはじめとするチンギス家王族の分地分民が設定されず、フレグの直接的な支配下に入ったことを呈示した。その一方で、これらの地域には、貢納、地租をはじめとする諸税、商税が課され、フレグ家の重要な収入源となった。

さらに『集史』のフレグ治世とアバガ治世の王侯任命の記事にもとづき、フレグには阿母河等処行尚書省の官僚と管轄地域の支配者の任命権が

なく、同行尚書省は、モンケの死後も、基本的には変わりに機能していたと思われることを確認した。そして 1261 年以降のフレグ家とジュチ家の対立、1262 年末のモンケ派とジュチ家の官僚の粛清、1265 年のアバガ即位、1270 年のチャガタイ家バラクのホラーサーン進軍、その後の元朝のクビライ・カアンによるアバガのイラン地域支配の承認を契機として、徐々に阿母河等処行尚書省のチングス家王族の権益と分地分民を管轄するという成立以来の機能は薄らぎ、イラン北東部の限られた地域を管轄する地方財務機関となっていくことを明らかにした。

そして最後に、1270 年代にイラン地域のチングス家王族の権益と分地分民が再整理されたことを提示したが、この出来事は、イルハン国の確立、フレグ家のイラン地域の権益獲得という事実と表裏一体であったと考えられる。この点については、稿を改めて、元朝との関係も考慮しながら検討したい。

また本稿では、モンゴル支配下のイラン地域の全体に一律に人口調査にもとづく人頭税が課されたわけではないことを確認したが、この事実は、長期的には、モンゴルがイラン高原の農耕地帯、商業網を掌握していく過程で、伝統的な支配体制から新たな統治システムを模索していくことを示している。この新たな統治システムの検討にも今後の課題としたい。

## 注

- (1) 伝統的に戸籍が存在しないイランやトルキスタンなどの地域では、人口調査を行い、人口に基づく新税を導入した。
- (2) クブチュルの徴収額は、モンケ治世のクブチュル設定時には 10 人毎に 70 ディーナールの税率で、フレグの西征時には富者に 500 ディーナール、貧者に 1 ディーナールが課された（本田 1991a: 288-89）。イルハン国期の簿記術指南書によると、1 人あたり 7 ディーナール、10-11 ディーナール（渡部 2013）などであった。
- (3) カランは、元来は賦役、軍役を指すが、現金納入で代用される場合もあつ

## 二つの「ディーワーン」

た（本田 1991a: 297-99）。

- (4) 例えばホラーサーン地方の東方に位置するスィースターン地方では、639/1240-41 年初めに「人口調査 (shumāra)」と「クブチュルとカラン (qalān) の設定」が実施された (*Sīstān*: 397; Bosworth 1994: 430)。この地域の統制は、ホラーサーン地方のヘラートを拠点とする地方政権クルト朝の支配者マリク (malik) に任せられていたが、イルハン国の恒常的な支配が及んだわけではない。
- (5) アルグン・アカは、1256 年に人口調査と税の設定報告のためにモンケの宮廷を訪れ、イランに帰還すると、再びグルジスタン地方で人口調査と千戸の設定と人口税クブチュルの設定を行った。グルジスタン州では、この時に始めてクブチュル税が課された (*Jahāngushāy*: II, 261; 北川 1998)。さらに 656/1258 年には、ホラーサーン州の州都ヘラートに、人口調査のための使節が送られている (*Harāt*: 278)。グルジスタンとヘラート一帯では、1258 年頃に再び人口調査が行われたと考えられる。
- (6) トゥメンの構造については別稿において改めて検討したい。
- (7) 鑄造貨幣の分布を研究した J. Kolbas は、アッラーンには、モンケ・カーンによるクブチュル税施行以前より、人頭税が課されていたと考察している (Kolbas 2006: 140)。
- (8) 限定的には主にモンゴル支配以前から存在した地租を指すが、徴税区ごとに差異が存在した (本田 1991a: 285; Lambton 1988: 189; 渡部 2013)。
- (9) イルハン国期のバグダードについては、Weissman (1990) と Gilli-Elewy (2000) を参照した。
- (10) アルトゥク朝支配地域における人口調査、Vāth の提示するイスラームの伝統的な税ではない苛税 (al-Kalaf)、al-Aqsāf、賦役 (Ḥaṣar as-Sūr) の性質、そのほかの税制については、なお検討を要する。
- (11) これらの地方政権については、Lambton (1986), Lamton (1987), Lane (2003), Aigle (2008) などに詳しい。
- (12) Kolbas は、アタベク・アビシュの名で 665/1266-67 年までに発行された銅貨が、アルグン・アカが人頭税徴収時に発行した貨幣と同じ六角形の枠組を有するため、ファールス州内での人頭税徴収と商用に使用されていた可能性を指摘している。ただ通常は、クブチュル税が銅貨により徴収されることはないため、フレグ治世にフレグの第 11 子モンケ・テムルと婚約したアビ

シュが、ファールス州で徴収した税収を王室財政と地方行政のために使用したと考察している (Kolbas 2006: 169-70)。

- (13) 書簡には、キルマーンの「カランとクブチュルと軍役 (charīk) と臨時超過税 (ikhrājāt)」「キルマーンのディーワーンのカランとクブチュルと臨時税 (ṭayyārāt) と苛税 (taklīfāt)」(*Mukātabāt*:11-12) とある。
- (14) 14 世紀に書かれた著者不明の『セルジューク朝史』の 1293-94 年の記述に、一例のみクブチュルという言葉が確認される。コニヤにおいて、5 代ガイハト・ハンがコニヤに派遣したアミールが「押収 (muṣādara) と qūbjūr により人々を苦しめた」(*Saljūq*: 130) とあるように、ここではペルシア語の「押収」という単語と併記されている。このようにコニヤの住人にクブチュル税が課せられた記録はほかになく、この記述にもとづきルームで正規のクブチュル税が恒常的に施行されていたと断定することはできない。またこの「押収」と qūbjūr は、類義語の併記表現とみなされ、この qūbjūr はモンゴル語 qubčiri の原義「取り集めること」「徴発」という意味で使用されている可能性もあるだろう。
- (15) モンゴルは、642/1244-45 年に、ダマスカスにおいて、富者に 10 ディーナール、中間層に 5 ディーナール、貧者に 1 ディーナールと、収入により課税額の異なる人頭税 (qaṭī'a) を課し (Patton 1991: 55)、アレppoでも税が課された (Amitai 1995: 20)。『世界征服者の歴史』によると、641/1243-44 年に、ルームとシャーム (シリア) とアレppoの支配者達がアルゲン・アカのもとに使節を送ったため、アルゲン・アカは正税 (māl) の回収のためにそれらの地域に使節を派遣した (*Jahāngushāy*: II, 243)。Patton は、この時にモスルもモンゴルによる課税対象地となったと推測する。ただし『ヘラート史記』によると、アルゲン・アカがモスルの人口調査のためにアミールを派遣したのは 646 年であり、モンゴルがモスルに直接に正規の税制システムを導入しようと試みるのは、数年後であったと思われる。
- (16) 『心魂の歓喜』には、ディヤール・バクル州とディヤール・ラビーア州の諸都市に対し、タムガ税がディーワーン税として課されていたという記述はない。
- (17) フレグ軍の先鋒キトブカが率いる軍隊は、1260 年に、後にマムルーク朝スルターンとなるバイバルスの軍隊とアイン・ジャールートで対戦して大敗を喫し、キトブカは捕虜となり処刑された。この対戦に従軍したタマ軍の万



## 二つの「ディーワーン」

戸長サーラール・ベクは敗走し、逃げ帰った。フレグは彼を処刑し、彼の諸千戸を他のアミール達に割当てた (*Jāmi'*: 74)

- (18) ディヤール・バクル州のモスルでは、バドル・アッディーン死後に、彼の子が前述のとおりマムルーク朝スルターンのもとに逃走した。
- (19) 渡部氏も『選史』のフレグ治世に「ディーワーンはアルゲン・アカの(家の)門にあった」(*Guzīda*: 590)という記述に着目し、同じ見解に達している(渡部 2013)。
- (20) この点について、筆者は別稿を準備している。
- (21) アターマリク・ジュワイニーは、アルゲン・アカがフレグの遠征軍を出迎えた後、モンケの宮廷に人口調査結果の報告に向かった際に、アルゲン・アカの指示により「イランの諸国の諸事の方策 (*tadbīr-i maṣāliḥ-i mamālik-i Irān*)」のために、アルゲン・アカの子ケレイ・マリク達と共にフレグに随行した (*Jahāngushāy*: III, 101)。この出来事をもってイルハン国の成立、中央ディーワーンの成立とみなす見方もあるが、それはあくまでもフレグのイラン到着をもってイルハン国成立とみなす『集史』の解釈であると思われる。この点については別稿で論じる。

## 文献目録

### 史料：

*Banākātī*: Dāwūd b. Muḥammad Banākātī. *Tārīkh-i Banākātī: Rawẓat ulī al-albāb fi ma'rifat al-tawārīkh wa al-ansāb*. Tehrān, 1348kh.

*Guzīda*: Ḥamd-Allāh Mustawfī. *Tārīkh-i Guzīda*. Ed. by 'A. Nawā'ī. Tehran, repr. 1362kh.

*Harāt*: Sayf b. Muḥammad al-Harawī. *Tārīkh-nāma-yi Harāt*. Ed. by M. Ṣiddīqī. Calcutta, 1944.

*Ḥawādith*: (Pseudo-)Ibn al-Fuwaṭī. *al-Ḥawādith al-jāmi'a wa al-tajārib al-nāfi'a*. Ed. by Mahdī Najm. Beirut, 2003.

*Jahāngushāy*: 'Alā' al-Dīn 'Aṭā Malik Juwaynī (d. 1283). *Tārīkh-i jahāngushāy*. 3 vols. Ed. by M. Qazwīnī. Leiden, 1911 (reprinted in Tehran, 1370kh).

*Jāmi'*: Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī. *Jāmi' al-tawārīkh*. 4 vols. Ed. by M. Rawshan and M. Mūsawī. Tehran, 1373kh.

*Majma'*: Muḥammad b. 'Alī Shabānkāra'ī. *Majma' al-ansāb*. Ed. by M. Muḥaddith.

Tehrân, 1363kh.

*Mukâtabât*: Rashîd al-Dîn Faḡl Allâh Hamadânî. *Mukâtabât-i Rashîdî*. Ed. by Muḥammad Shafî'. Lahor, 1947.

*Murshid*: al-Ḥasan b. 'Alî. *Murshid fî al-ḥisâb*. MS. Iran Parliament Library, 2154.

*Musâmarat*: Âqsarâ'î, Karîm al-Dîn Maḥmûd b. Muḥammad. *Mûsâmeret ül-Akhhâr: mogollar zamanında Türkiye Selçukluları tarihi*. Ed. by O. Turan. (reprinted in Tehrân, 1362kh).

*Nuzhat*: Ḥamd Allâh Mustawfî, *The Geographical Part of the Nuzhat al-Qulûb*, composed by Ḥamd-Allâh Mustawfî of Qazwîn in 740 (1340). Ed. by G. Le Strange. Frankfurt am Main, 1915.

*Saljûq*: anonym. *Târîkh-i âl-i Saljûq dar Ânâṭûlî*. Ed. by N. Jalâlî. Tehrân, 1378kh.

*Simţ*: Nâşir al-Dîn Munshî Kirmânî. *Simţ al-'ulâ lil-ḥaḍrat al-'uliyâ*. Ed. by 'A. Iqbâl. Tehran, 1328kh.

*Sistân*: anonym. *Târîkh-i Sistân*. Ed. by M Bahâr. (reprinted in Tehran, 1366kh).al-'

*Shâhî*: anonym. *Târîkh-i Shâhî*. Ed. by M. Bâstânî Pârîzî. Tehrân, 2535sh./1976.

*Shîrâz-nâma*: Mu'in al-Dîn Aḥmad Shîrâzî (d. 1387). *Shîrâz-nâma*. Ed. by I. W. Jawwâdî. Tehran, 1350kh.

*Zubdat*: Ḥâfîz-i Abrû. *Zubdat al-tawârikh*. vol.3. Ed. by K. Ḥâjj Sayyid Jawâdî. Tehran, 1380kh.

*Waşşâf*: Shihâb al-Dîn 'Abd-Allâh Shîrâzî (d. 1334). *Tajziyat al-Amşâr wa Tajziyat al-'Aşâr (Târîkh-i Waşşâf)*. Ed. by M. M. Işfahânî. Bombay, 1259A.H. (reprinted in Tehran).

*Galstjan*: A.Г. Галстян, *Армянские источники о Монголах: Извлечения из рукописей XIII-XIV вв.* Москва, 1962.

『元史』：中華書局。

研究文献：

Aigle, Denis 2008. "Iran under Mongol domination: The effectiveness and failings of a dual administrative system." *Bulletin d'études orientales*, 2008/2 (Supplément LVII): 65-78.

Allsen, Thomas. 1987. *Mongol Imperialism: The Politics of the Grand Qan Möngke in China, Russia, and the Islamic Lands 1251–1259*. Los Angeles.

- Amitai-Preiss, Reuven. 1995. *Mongols and Mamluks: The Mamluk-Īlkhānīd War, 1260-1281*. Cambridge.
- Aubin, Jean. 1995. *Émirs mongols et vizirs persans dans les remous de l'acculturation. Studia iranica*, cahier 15. Paris.
- Bayarsaikhan, D. 2010. *The Mongols and the Armenians (1220-1335)*. Leiden.
- Bosworth, C.E. 1994. *The History of the Saffarids of Sistan and the Maliks of Nimruz (247/861 to 949/1542-3)*. Costa Mesa.
- Boyle, J. A. 1997. *Genghis Khan: The History of the World-Conqueror by Ata-Malik Juvaini*. Ed. by D. O. Morgan. Manchester.
- Doerfer, Gerhard. 1963. *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*. Bd.1. Wiesbaden.
- Gilli-Elewy, H. 2000. *Bagdad nach dem Sturz des Kalifats: die Geschichte einer Provinz unter ilhānischer Herrschaft (656-735/1258-1335)*. Berlin.
- Humphreys, R. S. 1977. *From Saladin to the Mongols: The Ayyubids of Damascus, 1193-1260*. New York.
- Khosrowbigī, H and Y. Farrakhī. 1391. “Pazhūheshī darbāre-ye Sayf al-Dīn Bītikchī dīwānsālār-e musalmān doure-ye Hūlākū (ākharīn kārgozār-e ulūs-e Jūchī dar Īrān).” *Faṣḥnāme-ye ‘elmī-pazhūheshī: Pazhūheshnāme-ye Tārīkh-e Eslām*, 2-8: 61-81.
- Kolbas, J. 2006. *The Mongols in Iran, Chingiz Khan to Uljaytu 1220-1309*. London.
- Lambton, A. K. S. 1986. “Mongol Fiscal Administration in Persia.” *Studia Islamica*, 64: 74-99.
- 1987. “Mongol Fiscal Administration in Persia (Part II).” *Studia Islamica*, 65: 97-123.
- 1988. *Continuity and Change in Medieval Persia: Aspects of Administrative, Economic, and Social History, 11th-14th Century*. New York.
- Lane, George. 1999. “Arghun Aqa: Mongol Bureaucrat.” *Iranian Studies*, 32(4): 459-82.
- 2003. *Early Mongol Rule in Thirteenth-Century Iran : A Persian Renaissance*. London.
- Melville, Charles. 2009. “Anatolia under the Mongols.” *Cambridge History of Turkey*. vol.I. *Byzantium to Turkey 1071-1453*. Ed. by K. Fleet. Cambridge: 51-101.
- Minorsky, V. 1964. “Pūr-i Bahā and His Poems.” *Iranica: Twenty Articles*. Tehran: 292-305.

- Orhonlu, C. 1981. "KHĀṢṢ." *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition. vol. 4: 1094-99.
- Patton, D. 1991. *Badr al-Dīn Lu'lu': Atabeg of Mosul, 1211-1259*. Seattle.
- Spuler, B. 1985. *Die Mongolen in Iran: Politik, Verwaltung und Kultur der Ilkhanzeit*. Leiden.
- Väth, G. 1987. *Die Geschichte der artuqidischen Fürstentümer in Syrien und der Ġazīra'l-Furātīya (496-812/1002-1409)*. Berlin.
- Weissman, K. 1990. *Mongol Rule in Baghdad, Evidence from the Chronicle of Ibn al-Furwātī: 656 to 700 A.H./1258 to 1301 C.E.* PhD Thesis, The University of Chicago, Chicago, Illinois.
- 井谷鋼三 1980「モンゴル侵入後のルーム」『東洋史研究』39-2: 110-139.
- 1985「イルハン国とルーム」『イスラム世界』23・24: 34-54.
- 岩武昭男 2001『西のモンゴル帝国 —イルハン朝—』関西学院大学出版会.
- 愛宕松男 1988「蒙古人政権治下の漠地における版籍の問題」『愛宕松男東洋史学論集 第4巻元朝史』三一書房: 211-255 (初出『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』東洋史研究会: 283-429, 1950).
- 川本正知 2000「中央アジアのテュメンなる地域区分について」『西南アジア研究』53: 24-60.
- 2013『モンゴル帝国の軍隊と戦争』山川出版社.
- 北川誠一 1977「テグダル・オグルの反乱について」『オリエント』20-2: 57-73.
- 1978「モンゴル帝国のイラン支配とオルペリヤン家の台頭」『北海道大学文学部紀要』26-2: 51-112.
- 1983「シルヴァーンとグルジスタンのモンゴル軍」『北海道大学文学部紀要』32-1: 109-161.
- 1998「モンゴル帝国のグルジア征服」『オリエント』40-2: 69-84.
- 高木小苗 2009「フレグ遠征時のイランにおけるモンゴル王族の権限と私財」『史滴』31: 133-56.
- 本田実信 1991a「ガザン・ハンの税制改革」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会: 261-322 (初出『北海道大学文学部紀要』10, 1961).
- 1991b「タムガ税」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会: 323-32 (初出『和田博士古希記念東洋史論集』講談社, 1961).
- 1991c「阿母河等処行尚書省」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会: 101-26 (初出『北方文化研究』2, 1967).

## 二つの「ディーワーン」

- 1991d「モンゴルとイスラム」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会：197-232（初出『岩波講座世界史』8, 1969）.
- 1991e「イルハンの冬营地・夏营地」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会：357-81（初出『東洋史研究』34-4, 1976）.
- 前田直典 1973「元朝行省の成立過程」『元朝史の研究』東京大学出版会：145-202（初出『史学雑誌』56-6, 1945）.
- 松田孝一 1978「モンゴルの漢地統治制度—分地分民制を中心として」『待兼山論叢』2: 33-54.
- 1990「いわゆる元朝の軍戸数について」『布目潮瀧博士古稀記念論集 東アジアの法と社会』汲古書院.
- 村岡倫 1992「オゴデイ・ウルスの分立」『東洋史苑』39: 20-48.
- 1997「元代江南投下領とモンゴリアの遊牧集団」『龍谷紀要』18-2: 13-30.
- 森平雅彦 2013「事元期高麗における在来王朝体制の保全問題」『モンゴル覇権下の高麗：帝国秩序と王国の対応』名古屋大学出版会（初出『北東アジア研究』別冊第1号, 2008）.
- 四日市康博 2007「モンゴル帝国の国家構造における富の所有と分配—遊牧社会と定住社会, 中華世界とイラン世界—」『九州大学 21 世紀 COE プログラム「東アジアと日本：交流と変容」ワークショップ』: 165-81.
- 渡部良子 1997「イルハン朝の地方統治——ファールス地方行政を事例として」『日本中東学会年報』12: 185-216.
- 2007「*Daftar-i Dilgushā* に見えるシャバーンカーラ史の叙述——モンゴル時代史研究における韻文史書利用の可能性」『上智アジア学』25: 49-80
- 2011「13 世紀モンゴル支配期イランのペルシア語財務術指南書 *Murshid fi al-Hisāb*」高松洋一編『イラン式簿記術の発展と展開—イラン、マムルーク朝、オスマン朝下で作成された理論書と帳簿』イスラーム地域研究東洋文庫拠点：9-35.
- 2013「13-14 世紀モンゴル支配期イランの財政制度と財務帳簿：ペルシア語財務技術の発展と近世への継承」「近世イスラーム国家と多元的社会」2012 年度第 4 回研究会発表レジュメ（2013 年 3 月 2 日、於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）.

【表3】 モンケ・カアン治世、フレグ治世・アバガ治世の王侯の職掌・任地

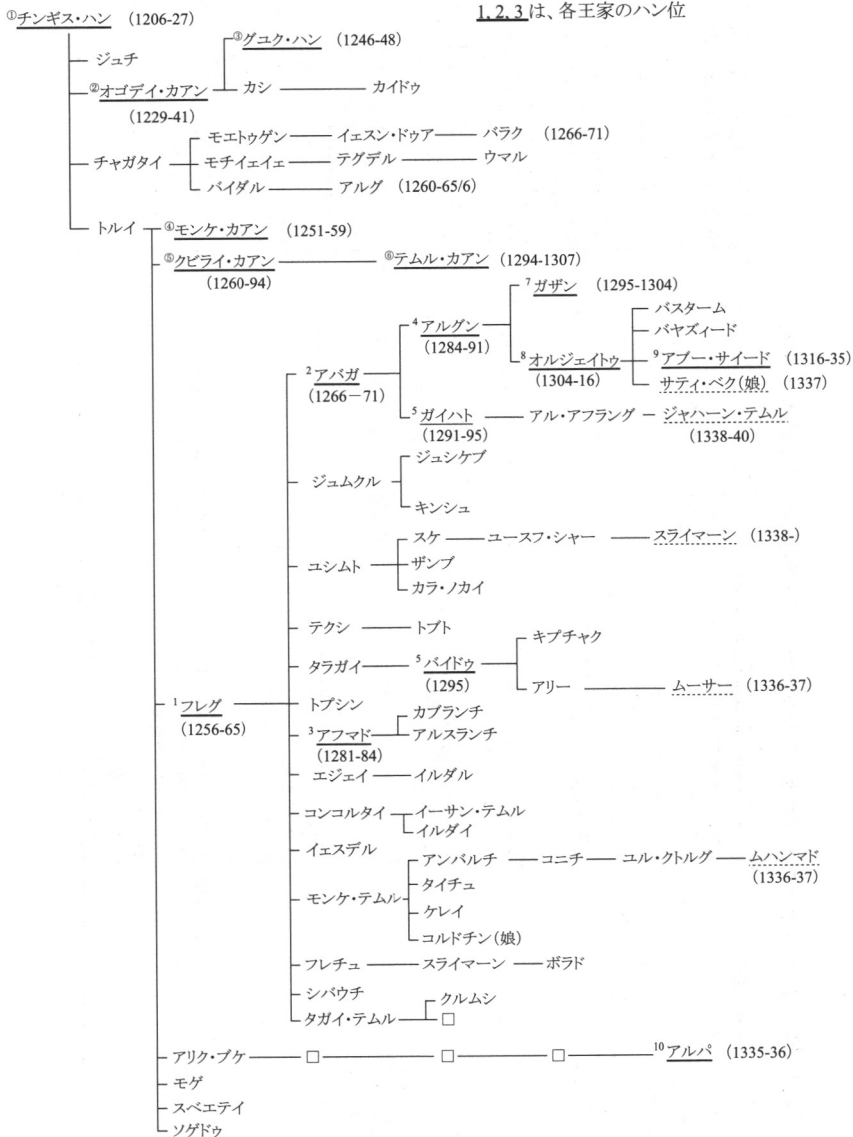
職掌・任地	モンケ治世 (Jahangushāy: II, 255-56)	フレグ治世 (Jāmi: 1049)	アバガ治世 (Jāmi: 1060)
阿母河等処行尚書省：長官	アルグン・アカ (再任) ノコロ(僭友)：ナイマタイ、タルマタイ		アルグン・アカ(留任)→死去
同省：長官の絶対代理	イッズ・アッディーン・ターヒル		
同省：大書記(ulugh bittkchi) →宰相(wazir)→ホラーサーンの宰相	大書記：フアフ・アッディーン →(子)フサーム・アッディーン・アミール・フサイン		イッズ・アッディーン・ターヒル →(子)ワジフ・アッディーン
同省：財務長官	バハー・アッディーン・ムハンマド		
各王家の代理、書記	【ソルカクタニ→アリク・ブケ】 書記：スィラージュ・アッディーン・シュジャーイー クビライ、フレグ、アリク・ブケ、モケの代理(nawkar)		
カアンの khaas の宰相 →諸国の財務長官		アミール・サイフ・アッディーン(処刑) →シャムス・アッディーン・ムハンマド	シャムス・アッディーン(留任)
アバガの直屬領(miqā)のアミール			アミール：アルタジュ・アカ
ヘラート(ホラーサーン主都)	【ヘラート、スィースターン、バルフ、その方面全体】		クルト朝：シャムス・アッディーン(鎮死) →子シャムス・アッディーン
ニームルーズ	クルト朝マリク：シャムス・アッディーン・クルト		
スィースターン	【ニージャブール・トゥースのトゥメン】		
ホラーサーン	ナースィル・アッディーン・アリーマリク	次子アバガ駐屯 (冬营地：マーザンダラーン)	フレグ第6子トプシン駐屯 アバガ長子アルグン駐屯
マーザンダラーン			
イラク・アジャム	【イスファハーンとクムとカーシャーンの諸トゥメン】 ナースィール・アッディーン・アリーマリク (→フレグにより罷免)		【イスファハーンと大部分イラクとヤズドの諸トゥメン】： バハー・アッディーン(財務長官の子、死去) 【カズウィーンとイラクの一部】： イフティハール・アッディーン・カズウィーニ(処刑)
アッラーン	マリク・知事：サドル・アッディーン・タプリーズ	第3子ユシムト駐屯 (→治世末に北上)	※アバガ冬营地

【表3 (続き)】 モンケ・カアン治世、フレグ治世・アバガ治世の王侯の職掌・任地

職掌・任地	モンケ治世 (Jaghatai: 1255-56)	フレグ治世 (Jami: 1049)	アバガ治世 (Jami: 1060)
アゼルバイジャン	マリク・知事：サドル・アッディーン・タ アリーズ	第3子ユシムト駐屯 →※フレグ冬営地	※アバガ冬営地 (Jaghatai と共に)
タブリーズ		サドル・アッディーン (留任)	マリク・サドル・アッディーン (留任)
ムーザン			フレグ第3子ユシムト駐屯
シルワーン/ダルバン(北方国境)			
大アルメニア			※アバガ夏営地：アラタグ
グルジスターン	バグラト朝：ダーウード		アミール：シレムン(父チヨルマダンのタ マ軍統帥)
ルーム	ルーム・セルジュク朝： ルケン・アッディーン	ルーム・セルジュク朝宰相： ムイーズ・アッディーン・バルワーナ (アバガ治世 1277 年処刑)	バグラト朝：ダーウードと子サドゥン アミール：トグ・ピチクチ (戦死) アミール：トグ・ダウ(戦死) →アミール：サマガルと Kukurkay
キルマーン	クトルグハン朝：ルケン・アッディーン	クトルグハン朝：テルケン・ハトン	クトルグハン朝：テルケン・ハトン (留任)
フアルス	サルグル朝：アブー・バクル	アミール：アンキヤス	アミール：スンジヤク・アカ
州都シーラーズ			アミール：スンジヤク・アカ
イラク・アラブ			アミールの代理：アラ・アッディーン (留任)
州都バグダード			※アバガの冬営地
ディヤール・バクル	【モスル】 アタバグ政権： バドゥル・アッディーン・ルウルウ		アミール：ドルベイ・ノヤン 知事：ジャラール・アッディーン・タリール 知事：ラディユ・アッディーン・バーバー (イラク・アジャム州のイフティハー ル・アッディーンの子弟)
ディヤール・ラビーア(ルームとの境域)	【マイヤーファアリキーン】 アイユブ朝：アル・カーミル・ムハンマド (フレグ軍により討滅) 【マルディーン】 アルトゥク朝： ナジュム・アッディーン・ガーズィー	王子ユシムトによる遠征 アミール：トダウ	アミール：ドルベイ・ノヤン アルトゥク朝： (子)マリク・ムザッファール・ファフ ル・アッディーン・カラアルスラーン

## ①チンギス・ハン (1206-27)

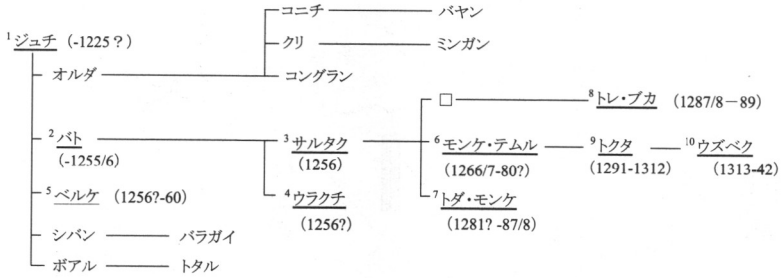
①②③……モンゴル帝国カアン位

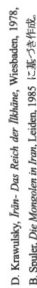




## 二つの「ディーワーン」

ジュチ家系図





# Two *Dīwāns* —Surveying the Reign of *Īrān Zamīn* in the Early Ilkhanids—

TAKAGI Sanae

This paper researches two *dīwāns*: the *dīwān* in Khorāsān of *Īrān Zamīn* under the supervision of the successive Mongol Qa'ans and the central *dīwān* in the Ilkhanid dynasty. After the death of Chinggis Khan, the founder of the Mongol Empire, an organisation (*dīwān*) was set up in Khorāsān, which took charge of financial administration for the regions conquered by the Mongols in West Asia. The *amīrs* and bureaucrats of this *dīwān* took a census and levied taxes. In 1256, Möngke Qa'an, one of the grandsons of Chinggis Khan, imposed a new poll tax called *qūpchūr* and apportioned the conquered populations and their registered places of residence among Chinggis's royal families, who were authorized to acquire interest from their allotted populations and places. Moreover, Möngke Qa'an dispatched his younger brother Hülegü to West Asia. Hülegü and his troops conquered Alamut, Baghdad and Diyar Rabī'a during 1256–1260. After Möngke Qa'an's death in 1259, Hülegü resided in *Īrān Zamīn* and the successor of Möngke, Qubilai Qa'an, approved Hülegü's reign over *Īrān Zamīn* in around 1260–1261. This summarizes the formation of the Ilkhanid dynasty.

In the first chapter of this paper, we confirm the regions apportioned among the royal families by Möngke Qa'an. In the second chapter, we claim that neither the *dīwān* nor Hülegü completed a census and levied the *qūpchūr* tax over both the regions conquered by Hülegü's troops and the regions under the reign of rulers who presented themselves before Hülegü to pay their respects. Furthermore, these regions and the populations appeared that they were not apportioned between the royal families and came under Hülegü's rule. In the third chapter, we concluded

that the *dīwān* continued to function after Möngke's death, and Hülegü seldom made the assignment jurisdiction for the *amīrs* and bureaucrats of this *dīwān*. Instead, Hülegü formed another *dīwān* which held jurisdiction over the regions under this reign. The fourth chapter presents that the *dīwān*, by degrees, changed into a provincial body for Khorāsān and its surrounding regions. This happened owing to the conflicts between Hülegü and Berke Khan, the ruler of the Joči's Ulus after 1261, the invasion of Khorāsān in 1270 by Baraq Khan, the ruler of the Chaghatai's Ulus, the approval of Qubilai Qa'an's as Hülegü's successor, Abaqa Khan's reign over *Īrān Zamīn* in 1270 and the death of Arghun Aqa, the chief *amīr* of *dīwān* in 1278. Subsequently, Hülegü's *dīwān*, or the central *dīwān* of Ilkhanids, took control of the whole *Īrān Zamīn*.